

教師が探究することの再発見

ー「第17回海外芸術・教育研修」への参加を通してー

須 増 啓 之

SUMASU Hiroyuki

1. はじめに

在外協定校における研究及び交流を目的とし、2018年9月11日から9月21日までの11日間、「第17回海外芸術・教育研修」に同行してイタリアを訪れた。本学連携協定幼小一貫校や大学を視察することで教育における見識を深め、今後の研究に生かしていきたいと考え、研修に参加させていただいた。研修期間中、美術館や街の中でイタリアの芸術に直に触れるプログラムも多くあり、それらについての報告も考えたが、本稿ではレッジョ・エミリア市ローリス・マラグッツィ国際センター（9月13日訪問）とミラノのマリア・コンソラトリチェ幼小一貫教育校（9月19日訪問）などの教育関係の研修を中心に報告したい。

2. レッジョ・エミリア市ローリス・マラグッツィ国際センター

2-1. レッジョ・エミリアの幼児教育とローリス・マラグッツィ国際センター

レッジョ・エミリアの幼児教育については、2017年と2018年に本学で開催された国際教育フォーラムにおいてペダゴジスタ（教育専門家）とアトリエリスタ（芸術専門家）を招聘し、講演をいただいている。以下、講演内容や資料を基にレッジョ・エミリアの幼児教育について簡単にまとめておく¹⁾。まず、1945年に住民が自発的に学校をつくり、運営をはじめたことがレッジョ・エミリア市の幼児教育の始まりとしてある。その後、レッジョ・エミリア市立幼児学校の第一校が1963年に開校され、教育学者ローリス・マラグッツィ（1920ー1994）の教育理念を中心にレッジョ・エミリアの幼児教育が構築されていった。

その教育の大きな特徴の一つとして「プロジェ

クト活動」が挙げられる。それは教育テーマを基に、子供たちが自発的に素材や生活などと対話することからはじまり、活動が広がり、深まっていく学びのことである。1年かける活動もあり、その過程の中で子供たちの概念が組み立てられ、表現や研究などを通して世界を理解していく。それらを可能にしているのは、素材や他者と対話的に活動できる「アトリエ」という全ての学校に義務付けられた場所と、芸術の専門的知識を持つ専門家としてのアトリエリスタの存在である。そこには芸術が科学や哲学などの分野と結びつき、広がりを持つことができるという考えがあった。また、完成された作品が主となるのではなく過程が重視されるため、子供の学びを可視化し、他者に伝える記録「ドキュメンテーション」が作成されることも教育方法の特徴として挙げられる。それらの特徴からレッジョ・エミリアの教育方法は探究の教育学や変化していく教育学ともいわれている。その他、様々な特徴があるが、レッジョ・エミリアの幼児教育については多くの書籍もあるので、ここでは省くことにしたい。

次に、本研修で訪れたローリス・マラグッツィ国際センターについて紹介したい。本センターはレッジョ・エミリアの幼児教育を広めるために1994年にレッジョ・チルドレンが組織され、その後2006年に設立された施設である。近年、レッジョ・エミリアの幼児教育に興味を持つ人々が世界中から訪れる施設となっており、その歴史や園で使用されている教材・素材などが展示され、スタッフによる研修なども受けることができる。また、センターは幼稚園とも連携しており、開発された教材やシステムなどを提供し、それぞれの園での活動に導入されている。現在、レッジョ・エミリア

の教育方法を生かした幼小接続の試みとして小学校も設立され、今後、小学校の実践においても広がりが出てくると思われる。

今回のセンターでの研修は、ペダゴジスタによる講演を聴講し、その後センター内を見学させていただくという内容であった。

2-2. ペダゴジスタによるプロジェクト活動についての講演から

まず、ペダゴジスタ（教育専門家）のパオラ・ストロツィ氏よりプロジェクトの「グラフィック・言葉・素材・モザイク」の講演をいただいた²⁾。今回、研修に参加した学生は国際教育フォーラム等で、レッジョ・エミリアの幼児教育について聴講しているため、プロジェクトの実践について具体的に説明していただけることとなった。

そのプロジェクトの内容については写真や映像が主であるため説明が難しいが、白い紙に黒ペンで描くのではなく、いろいろな素材を提供し、想像力を働かせ、デッサンをしていくというものであった。ここでのデッサンは、描画材を使用して媒体に様々な方法で描く、表現するという意味合いが強い。「言葉をどのようにデッサンへつなげるのか」「デッサンや素材がどのようにして言語能力につながるのか」といった教育テーマの「探究的な学び」を子供たちに提案していく過程や、その中での子供の様子を中心に解説していただいた。デッサンをすること自体が語り（ストーリー）となり、複雑さを生むものであった。映像の中で子供たちはビニールのような材料を選んだり、いろいろな場所で描いたり、活動の中で驚いたりするなど、生き生きとした表情や姿が見られた。その活動はやがて魔女の話になり、絵本として発表されることになる。以下、パオラ氏の講演の内容から、気付いた点について簡単にまとめた。

まずは教師の役割、教師としての立ち位置についてである。パオラ氏は「教師は常に研究者」であるということを強調されている。研究者として子供に質問を投げかけ、子供の言葉を発展させていくことが教師の一つの役割である。それと同じく「子供も研究者」であるという意識を持ち、両者の間に境目をつくらないということが重要であると述べられた。

たとえば映像の中では、1歳の女の子に描くための道具を提供すると、別のことに興味を抱き、違う活動を始めた場面があった。それは線を描くことよりも、絵を描く道具のペンの持ち方に興味を示し、持って動かしたりしながら持ち方を試す、つまり研究を始めた瞬間だったといえる。また声のトーンに合わせて表現を変えたり、石に水で絵を描いて消えていく様子を見ていたりする子供の姿もあり、それらは研究心に溢れていた。その他、子供たちが実際に体験し、失敗しながら取り組んでいく学びの姿や、他の子供たちに自分の学びを共有していくためにどうしていくのかを考えている姿などが見られた。

そのような子供の活動や研究心を感じ取ったり、受容したりするためには、教師やアトリエリスタが子供の行為や芸術をどう理解するかが重要となってくる。また、自分の描いた縦線を横にして「眠っている線だよ」と答えたり、にじんだインクを見て「絵が怒ってしまった」と発言したりできる子供の世界観を大切にすることがある。そのためには教師という大人は子供目線で体験すること、つまり頭で結論づけるのではなく手や身体を使って考えることが重要となる。

そして子供たちの活動を広げ、深めていくことで研究心を溢れさせるためには、環境づくりが重要となってくる。素材の紙も厚みや色、材質が異なるものが用意され、ペンや色鉛筆、パス、インクなどの描画材の種類や色数も多数用意されていた。そこには子供に適した道具だけを渡すと、子供の成長につながらないという考えがある。困難をあえて子供に与えることで成長につながると考えられているからである。

また、パオラ氏はドキュメンテーションにおける記録の大切さについて強調されていた。ドキュメンテーションは子供の活動や学びを文字に起こし、振り返るために作成される。それらは子供、教師、保護者に共有されて振り返ることができる総合的な記録となる。プロジェクト活動においては特に結果だけを重視するのではないため、そこにたどり着く物語や過程を観察し、感情移入していくことでまとめることが重要となる。また、ドキュメンテーションはポイントを決めて、自分な

りに記録することが大切であり、その方法は研修を通して学んでいくことで身につくとされている。講演の最後には、パオラ氏から保育者や教員を目指す学生たちへのメッセージとして、是非とも保育や教育の中でドキュメンテーションをつかってほしいと述べられた。

2-3. センター内のアトリエ展示の見学

講演の後、学生とともにアトリエ展示の見学に参加した。偶然にもアトリエスタの研修できている日本人の方に説明をしていただいた。まず、施設1階にある光を使った装置やパソコンを使用したインタラクティブな題材などを体験できる展示スペースを見学した。

光を使った題材を研究中で、中には企業と共同で新たな教材を開発しているものもあった。それらを使い、光とかがわることで生まれる形や色を心から楽しんでいる学生の姿も多くみられた(図1、図2)。展示されているものを見ると、教材開発にいかに力を入れているのがわかる。ここでは教えるための「教材」という言葉は適さず、「装置」「実験道具」というべきかもしれない。日本では題材を考えることがあっても、活動のための装置まで考えることはない。基本的には各園のアトリエスタが活動を考えるが、センターは園とも連携しているため、新たな装置を園に提供し、それぞれの園で異なった使い方や実践を行っていくこともあると説明された。素材の充実も重要であるが、個々の表現と環境をつなぐ媒体としての装置も子供の活動を広げる要素となる。従来のカメラやパソコン、プロジェクターだけでなく、新たな媒体としての装置の開発に興味を持った。

次に素材やドキュメンテーションが展示されている2階を見学した。パオラ氏の講演で紹介されたプロジェクト活動で使用された素材や道具も机の上に並べられており、その種類の多さには驚かされた(図3)。またドキュメンテーションも見ることができるようになっていた。その他、粘土や紙などの題材研究というべきか、素材へのかかわりを試した痕跡としてのもの自体が展示されており、素材へのかかわりの多様性を理解するきっかけになる場所であると感られた(図4)。

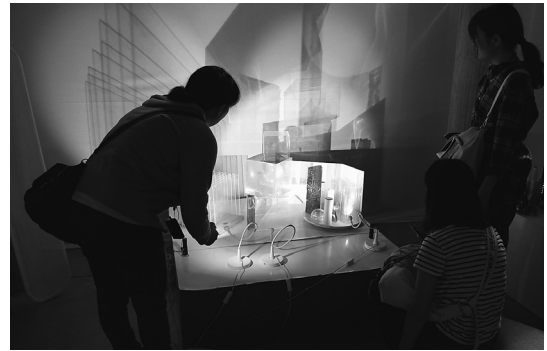


図1 光の装置を試して、壁に映る色や形の重なりを感じる学生の様子



図2 光を反射させてつなげる装置を楽しむ学生の様子



図3 並べられた素材と用具



図4 粘土へのかかわり方の痕跡の展示

筆者自身、レッジ・エミリアの教育について書籍や映像で見たことはあったが、光を使った装置を実際に体験したり、多く並べられた素材や行為の痕跡を間近で見たりすると、全感覚で楽しむことができる空間や環境づくりが重視されていることが再確認できた。アトリエは芸術や科学、哲学などの分野を結び付け、子供の可能性を引き出すための場とされている。つまり、教師は子供たちがアイデアを生み出す場や環境を考えていくことが重要となる。教師として、そのような場や環境をいかに生み出すことができるのか、その力量も求められてくると考えさせられた。

3. マリア・コンソラトリチェ幼稚園

9月19日に訪問したミラノのマリア・コンソラトリチェ幼小一貫教育校では、2～11歳まで一貫した教育を受けることができる。マリア・コンソラトリチェ幼稚園は2歳児クラスと3～6歳の異年齢クラスで構成されており、1クラス25名で教師が2名、1日の保育時間は8～10時間である。15年間でクラス構成を試み、現在の異年齢のクラス構成に至っている。それは大きな子供が小さい子供を助けようとする家庭を象徴しているためだ。イザベッラ・ヴァッリ氏（幼稚園 園長）に園の中を説明していただきながら、学生たちと見学をさせていただいた。イタリアの園や学校は9月始まりであり、訪問当時、まだ園に慣れていない子供たちも多くいるとのことであった。

壁は主に白と水色で構成されており、青や黄色などの遊具や家具で満たされた色鮮やかな園舎であり、自由に行き来できるように扉は解放されていた。そして、教室や廊下にはドキュメンテーションや作品が掲示されていた。日本と比べて色が多く使われている理由について質問すると、芸術やデザインの国であることと、色があることで空気が華やかになり、学校が楽しい場であるという雰囲気が出るためという答えが返ってきた。

子供たちが学ぶ教室は八角形の形をしており、教室の中心には子供たちが集まって対話や活動をするための広い空間が設けてある。そして、その周りに「読書」「日常生活」「手作業」「擬似遊び」のスペースなどがある（図5、図6）。小グルー

プで自由に活動や発言ができる場となっており、各スペースは椅子が4つしかないなど人数制になっている。子供のやりたいことをさせるためと、一カ所に子供たちが集中しないようにするためという理由がある。

教育に関しては、幼稚園では1年間の教育テーマを決定して行われている。今年度の1年間かけて取り組む教育テーマは「挑戦」である。そこには「勇気を持って」「大きな望みを持って、立ち向かえ」という願いがある。その計画は常に変化していく。まず今年のテーマをどう子供に伝えるかを考え、タングラムを使用することにした。タングラムとは正方形を7つのパーツに切り分けて使うパズルである。始業式の日、タングラムの1ピースを一人ずつに渡したという。力を合わせると一つの形になる。または、一つの四角形から飛び出していくという可能性を期待しているとのことであった（図7）。

また、園では週一回火曜日に研修会が行われている。そこで教師にタングラムを使った101個の教材や活動の提案、アイデアを出すという指示を与えたという。まだ始まったばかりだが、一つのことにこだわらず、現在、それぞれの教師がクラ



図5 日常生活のスペースで遊ぶ子供たち



図6 室内の砂場で遊ぶ子供の様子



図7 教室に掲示されたタングラム

スで展開している。タングラムはカクカクしているので、ピカソやカンディンスキーなどのアートへ発展の可能性もあるとのことだった。この後どのように展開するのか、1年間を通して見てみたいと思う実践であった。

見学終了後、学生たちが質問をする機会があった。教師として何を大切にしているかという質問に対してイザベッラ氏は、子供は空っぽの存在ではないということを意識する重要性について語られた。学びとは大人が詰め込み、満たしていくことではない。そして子供に対して興味や関心を持つこと、耳を傾けること、考えを尊重することが子供の個性を理解することにつながるということであった。そのためには教師も子供と一緒に動いていくことで学ぶことが重要となる。それは身体を使って実体験する園の教育方法が背景としてあるからであろう。また、クラスの子供の名前を呼ぶときは、その子供という人間と対峙していると常に考えてほしいと伝えられた。その個性が集まっているクラスを一つのものとして見ていき、サポートしていくことが重要となる。その他、園長としては学校全体でポジティブな雰囲気をつくることに重点を置いているということも仰っていた。見学させていただいて、その雰囲気をお子や教師の様子から感じる事ができた。

4. その他の本学連携協定校での見学について

前述した以外の研修では、モンテッソーリ教育認可幼小一貫校（9月17日訪問）とミラノ・サクロ・クオーレ・カトリック大学（9月18日訪問）を見学させていただいた。紙幅の都合上、以下、簡単にまとめておきたい。

4-1. モンテッソーリ教育認可幼小一貫校

ミラノのモンテッソーリ教育認可幼小一貫校では、ローザ・ディピエッロ氏（校長・園長）に校内を案内していただいた。実際に子供たちが学んでいる姿を直に見ることができ、その学びについて説明していただけたので、教育方法や教師が考えた手づくりの教具などを興味深く見ることができける機会となった。

その教育方法の特徴は、学年ごとにプログラムはなく、自由な環境の中で教師は一人ひとりに目を向け、一人ひとりが違うことをやっているということである。能力ややりたいことが違うため、子供の目線に立ち、興味を尽きさせないようにマテリアルが多数用意されており、子供たちはそれらを選んでやり終える（図8、図9）。その中には中学生レベル以上の先取りした内容もある。国語や算数の教材によって教室が分かれており、その中でマテリアルは毎年追加されていく。それらを使って子供たちが自分の力で探求する場を整えることで、教師は子供の自立へとつなげていく。そのため、困難に立ち向かっている子供をサポート



図8 3人グループで教具を使って算数の問題を解いている様子



図9 国の形の木製パズルを用いて学んでいる様子

トすることが教師の役割であるとされる。つまり自発的な学びをさせるために環境を整えたうえで、「もっとやりたい」「もっと知りたい」という欲求のために自由を与えることが重視される。実際、見学中、教師が作成した様々な教具で学んでいる姿が見られた。そのような子供をサポートするために、モンテッソーリの学校においても、教員の研修を重視していることが伺えた。

また、室内はカラフルな棚や文具が落ち着いた感じで整えられており、個々が主張することのない環境に興味を持った。モンテッソーリ教育において整理整頓が身も心もきれいになることにつながることを重視しているからであろう。

4.2. ミラノ・サクロ・クオーレ・カトリック大学

次に訪問したミラノ・サクロ・クオーレ・カトリック大学 (Università Cattolica del Sacro Cuore) では、ピエール・チェザーレ・リヴォルテッラ教授 (教員養成学部長) に大学構内の施設を案内していただいた。訪問日は学位授与式や卒業試験としての口頭試問が行われており、特別な大学の様子を見る機会となった。大学での研修は学生同士の交流や研修が主であったが、その中で教員養成課程のカリキュラムやポートフォリオの作成などについて知ることができた。

幼児学習科学部は5年制であり、大学の卒業証書が日本での国家試験の合格と同等、幼児教育と小学校教育の資格となる。大学は前・後期制であり、講義、ラボ (ゼミナール)、実習と1週間に平均30時間大学にいるようになっている。27科目あり、教育学や心理学などの専門科目と子供に教える科目で構成されている。ラボ (ゼミナール) は18ラボを受講し、1ラボにつき20時間、興味や関心のあるテーマを決めて、実践に近いことを行いながらさらに深く学んでいく。教師自身が興味を持って学びたいという意欲を持つことが重要であると考えられているからであろう。

1年生で基礎を学んだあと、2年生から実習が始まる。まず、最初の実習として「間接的実習」を行う。公立の幼稚園、小学校で働いている教師と4年間契約しており、大学の中で実習や実践が行われる。そして、実際の園で70時間から100時

間の「直接的実習」を行い、まとめとして再度、大学内での「間接的実習」を行うことになっている。2年生からの4年間で600時間の実習が課せられており、卒業認定の条件となっている。

また、2年生から4年生までeポートフォリオの作成があり、実習の日誌なども形式が自由で、学生自身が活動を終えた結果などをまとめることで、さらに考察するきっかけになっていると考える。それらは教授法でまとめるテクニックを学んだうえで行われている。報告してくれた学生は、個性が出るのが楽しいと話してくれた。日本では決まったテンプレートに決まった内容で埋めていく形式が多いが、自分の視点でまとめていくシステムは興味深かった。筆者自身が教員養成校で学び、そのあと養成校で教えていることもあり、さらに詳しく海外の教員養成大学の課程やシステムについて知りたいと思った。

5. おわりに

以上、イタリアの教育について筆者自身の勉強不足もあるが、「第17回海外芸術・教育研修」における教育に関する研修について報告としてまとめた。研修では見ること、聞くことがすべて新鮮で、様々な経験を通して学ぶべきこと、今後に生かしていくことが多くあった。今回、参加させていただいた研修を通して、共通して言えることは、子供のことを中心に考えて教師が動くこと、そのための教師の研修が徹底されていることである。子供が主体的に学び、活動の中でアイデアを生み出す場や環境をつくりだすために、教師自身が探究し続けなければならないことを改めて考えさせられた。それは自明のことであるが、難しい。大学で授業を行っている、マンネリ化していることを理解しつつも、マイナーチェンジを繰り返してしまっている自分がある。そして、大人である教師がサポートし、子供に問いかけることが重要であることも改めて考えさせられる。子供ではないが、大学生に教えることや伝えることで精一杯になっており、大学生に問いかけていくことも意識していかなければならないと感じた。

また、研修で見聞したイタリアの教育を日本や大学の教育にスライドすることは難しいと考える。

しかし、子供を中心に考えるという根底にあるものは変わらない。確かに表面上、使いやすいものや効果的なものを持つてくることは簡単ではあるが、やはり目の前の子供を見て見極め、題材や環境を創造する力が教師にとって重要となるであろう。さらに、日本の保育や教育においてレッジョ・エミリアのように芸術と科学などを結びつけていくのであれば、芸術だけではなく科学や技術の知識を持ち、保育や教育に活用できる人材（アトリエリスタを含め）をいかに育成していくのか、教員養成の視点も重要となってくると考える。

以上、研修を通して考えてきたことを述べたが、本研修での学びを今後に生かしていくことが重要であり、筆者自身や学生を含め、教師が探究していくために、まずは大学の教育において自分に何ができるのかについて考えていきたい。

【註】

- 1) 2017年7月17日、本学開催の「第12回国際教育フォーラム2017」において「レッジョ・エミリア・アプローチに学ぶ～子どもの主体的な学びを育むプロジェクト活動～」をテーマにパオラ・ストロツィ氏（教育専門家）とマッシモ・ギラルディ氏（芸術専門家）に講演をいただいた。その内容や資料を参考にした。
- 2) 紹介していただいたプロジェクトは『MOSAIC OF MARKS WORDS, MATERIAL』として REGGIO CHILDREN より2015年3月に刊行されている。

謝辞

今回、海外研修という貴重な体験の機会をいただきました山根理事長、三井学長、国際交流センターの職員の皆様、学科長古川先生、そして「海外芸術・教育研修」を企画・担当されている山本先生、科目担当教員の柴先生、猪田先生、間瀬先生、本学の教職員の皆様に感謝いたします。

また、通訳の平吹様やツアーコンダクターの伊藤様にもお世話になりました。このように日本語でまとめることができました。感謝いたします。

そして、研修の中で学生と行動を共にし、学生の学んでいる姿や交流する姿を見て、自分自身も学生に戻ったような感覚で芸術や教育、子供、イタリアの人々や街に触れることができました。学生の皆さん、ありがとうございました。